染付の受容から見る中日茶文化の相違について

葉　晶晶

はじめに

中国の青花は日本で染付と呼ばれ、素焼きした白地の器に酸化コバルトを主成分とする顔料で模様が描かれた陶磁器のことで、14 世紀半ば頃に日本に請来されたと知られている1。中国明代初期の美術工芸品の評論書『格古要論』(1387)には、青色及び五色の模様を有する物は甚だ俗であると評価されていたが、15 世紀以降、その様式が多彩となり、技法が一層洗練され、「青花の黄金時代」(明・永楽、宣徳、1403 年～1435 年）を迎えてからも、長きに渡って生産が続けられている。江西省景徳鎮はその生産や輸出で「磁器の都」と呼ばれるようになり、未だにも国際社会で大きな影響を及ぼしている。一方、日本では、15、16 世紀の明日貿易により、大量の染付が舶載されてきたにも関わらず、1511 年に成立した唐物鑑定書とも言える『君台観左右帳記』には、天目茶碗や青磁茶碗などの記載があったものの、染付に関する記載は一切なかった。17 世紀の江戸時代初期になると、ようやく「古染付」、「祥瑞」、「呉洲」など、日本側の注文を受けて景徳鎮や中国南部の福建で焼かれた染付が頻繁に茶会で登場し、茶碗、花入、香合、水指などとしての使用が多く見られるようになった。このように、染付に関しては、中国でも日本でも登場した最初から大いに歓迎されたのではなく、受け入れるまでに時間がかかったと言える。では、その受容に具体的にどのような背景や事情があり、そこからどのような中日茶文化の相違が見えるかについて、当時の両国の状況を考察しながら究明してみたいと思う。

1　中国の染付の歴史及びその評価

コバルトの使用や釉下への彩絵手法など染付の技法を生み出す土壌は早い段階から形成されたが、その陶磁器がいつ作られたかについて、中国国内では、唐代説、宋代説、元代説など様々な観点がある。定説はないが、生産開始を 13 世紀末、一定規模の生産を元代中期、つまり 1330 年前後と見ることが近年の発掘資料により有力な説として浮上している2。「デイヴィッド瓶」とも言われるデイヴィッド財団（英）の所蔵する青花雲龍文双耳瓶は、至正十一年（1351）という明確な年号を持つもので世界的に知られている元青花の例である。この時代は、中国で主流の喫茶法が抹茶を用いる点茶法から茶葉を用いる淹茶法（泡茶法）に移行しつつある時期でもある。この時代から染付の様式や生産体制が徐々に整えられ、明代（1368 年～1644 年）に隆盛期を迎えた。日本史で言うと、南北朝～江戸初期に当たる。「青花」の文字記録として明の馬歓が書いた『瀛涯勝覧』(1451 年）を最初の例とするのが通説であるが、南宋の蒋祈が編纂した『陶記』(1214～1234 年）に見られる「青白器」が染付を指す説もある。いずれにしても「青花」という用語は、明代初期の 15 世紀前半に一般化していたと思われる。中国では「花」という漢字は植物の花の意味のほかに、「文様」という意味もあり、「青花」は青い文様に由来する名称である。また、白磁の釉下に絵付けを施し、透明な釉薬をかけてから 1300 度前後の高温で焼き上げるという技法から釉裏青とも呼ばれ、英語では blue and white と称する。染付誕生の契機として、景徳鎮の青白磁の装飾技法である「刻花文」や「ビーズ紐繋ぎ文」のような彫塑的な装飾から、青白磁や白磁に用いられた「紅釉」や「釉裏紅」などの絵画的な装飾へ

---

[1] 長谷部楽爾監修『日本出土の中国陶磁』、平凡社、1995 年、p121。
[2] 夏孝言、李其江、陳天民、「過去 10 年間の元青花の考古学的発見と研究成果の概観」『中国陶磁器工業』、2022,29(03)、p46。

と移行したところで、海外からコバルトが流入した結果であると言われる。

元代の染付には、大型の器物に複雑な文様を描いたものが多く、重厚な器形と調和し力感に満ちており、白や青を神聖な色として好む中近東などに輸出された。しかし、モンゴルという異民族によって支配された元代に作られた染付は、ペルシャ文化からの影響が強く、当時の中国の文人層で高い評価を得られなかった。元代は「陶磁の暗黒時代」とまで呼ばれていた。その評価は明代初期まで影響を及ぼしていた。例えば、上述した『格古要論』の「古窯器論」には、景徳鎮窯の染付が非常に俗であるという悪評さえ見られる。

一方、時代が下がると、評価は少しずつ変わってきた。明代初期に、対外貿易策や南洋航海の影響を受けて西アジアとの貿易が盛んになり、海外需要の増大によって、わずか数十年の間に景徳鎮の名は海外で染付の産地として名声を博し、その後国内市場にも広まっていった。特に 1369 年に景徳鎮の珠山に御器廠と呼ばれる官窯が設置されてから3、生産制度が整って技法や様式が洗練され、宮廷用高級品や献上品が多く生産された。同時に、現江西省、浙江省、福建省などに民窯も数多く出現し、全国で広く分布していた。官窯の染付は、輸入されたコバルトを使用することが多く、発色がよく色が鮮やかであるのに対し、民窯のほうは、色が薄く時に灰色を帯びているのが特徴である。16 世紀初期～16 世紀半ば（明の正徳後期、嘉靖、隆慶、万歴初期）以外に、民窯では全て国産コバルトを使用していた4。永楽年間（1403 年～1424 年）に鄭和の南海大遠征により、海外から優れたコバルトをもたらして多くの優品を作り、宣徳年間（1403 年～1435 年）に釉上彩絵分野での技法がさらに進み、唐草文や束蓮文が描かれた燭台、壷や大型の盤など多彩が器形が生まれ、染付生産の最盛期を迎えた。その後の嘉靖年間（1522 年～1566 年）には、「官搭民焼」という官窯から民窯への製造委託が実施されるほど、海外の注文も含め染付の発注量が多かった。万暦（1573 年～1620 年）後期になると、官窯は力が衰えて廃止になり、民窯のみの生産体制となったことで、民窯は活況を呈した。日本の茶人たちが親しむ「古染付」もその後の天啓（1621 年～1627 年）の間に民窯から輸出されたものであると言われる。また、明末の動乱で官窯の多くの職人が民窯に流出したため、清代(1636 年～1912 年)の民窯の発展は著しく、特に社会が安定していた康熙～乾隆年間（1662 年～1799 年）に、染付の生産規模は大きかった。海外向けの輸出品の他に、国内向けでは宮廷用製品の他、知識人や富裕層が用いる室礼道具、茶器や文房具、一般庶民が日常に使い皿や碗などの食器など幅広く生産されていた。このように、洗練された染付は、宮廷御器や海外輸出品として認知され、名実ともに中国陶磁の代表的存在となり、明清陶磁器の基幹となった。

染付について、明の許次紓の『茶疏』(1597)には、「茶碗は、(略）今日では純白のものを佳とする。同時に、小さいのを貴ぶ。(略）次は真物の回青がよい。」5という評価がある。この文に挙げた回青は、染付に使う鉱物性顔料のことである。すなわち、お茶を飲む際に、染付茶碗も良いとされるが、純白のものほど良くないということである。また、清代の藍浦が景徳鎮陶業の全般を詳述した陶書『景徳鎮陶録』(1815）には、古い陶磁は青磁が良く、茶や酒にふさわしいが、料理の場合、白磁、青花白地磁（染付）が好ましいという評価がある。つまり、染付の場合、茶器というより、料理向けの皿で、いわゆる生活用品として好評であったと言える。

このように、染付の歴史から見れば、イスラム圏の影響で完成したものと言えよう。実用性の他に、貿易磁器という性格を持つため、国内の評価も海外からの好評によって変わっていく。中国国内では染付が生活

---

[3] 諸説があり、ここで挙げた 1369 年は『景徳鎮陶録』(1815）によるものである。他に、1402 年説、1426 年説がある。

[4] 李瓊環、何建斌「明代青花磁器及び対外交流について」『遼寧省博物館紀要 2020』、p167。

[5]布目潮風、中村喬『中国の茶書』、東洋文庫、1983 年、p356。

用品として好評されるなどの事情に基づき、染付が早い時期に日本に渡来したにもかかわらず、茶碗に用いられなかった理由として、渡来した染付が碗にしても皿にしても日常生活用具ばかりであり、茶の湯に使えるような器ではなかったからであると主張する学者もいる6。その説にも一理があるが、見立てや転用などが頻繁に行われた茶の湯の場合、他に理由もあったのではないかと思われる。その具体的な受容状況について、日本喫茶史を辿りながら考察してみよう。

2　日本における染付の受容状況

中国伝来品がそのまま音読みで日本に伝わってきたものが多いが、日本では染織の藍染から想を得て代わりに「染付」という名称を付けたと言われる。染付の名称が文献での初見は東坊城秀長の日記『迎陽記』1380 年 6 月 9 日条に見える「ちゃわんそめつけ」という花器である。日本の喫茶史によると、抹茶を用いる宋代点茶法は鎌倉初期に入宋した禅僧栄西によって日本にもたらされた。最初に禅宗寺院を中心とした喫茶風習が、14 世紀前半に禅院茶礼に見倣った寄合性の強いものに変わり、「喫茶の亭」又は会所と呼ばれる場所で振る舞われた。各地の茶を飲み当てる闘茶など娯楽性の強い遊びが武家階級の間で広まったことで、より多くの人がお茶を飲み始め、後に確立する茶の湯の基盤となった。

室町時代になると、特に足利将軍 6 代義教の頃に書院造という和風化された会所が出現し、豪華な工芸品を飾り立てた座敷で、唐物道具を鑑賞しながらお茶を飲む茶会が多く行われた。戦乱の中で、「東山御物」と呼ばれる唐物は、幕府財政難のために売却され、応仁・文明の乱により散逸して堺の豪商たちの手元に集まられ、重宝されていた。宋元時代の物を貴ぶという尚古主義は、そのまま茶の湯の草創期にも反映されている。それが、茶の湯の草創期に、権威付けのために染付という現世物よりも骨董品という付加価値がある宋元時代の物を選んだ理由でもある。況してや建盞、青磁、白磁の茶碗は喫茶伝来の中国本場でも使われた物で、初期にこれらの茶碗を使うのも想像できる。

ただし、この時代に染付が全く使われないというわけではない。15 世紀の公家日記に既に染付の花瓶が見られ、例えば『看聞御記』1425 年 7 月 5 日条に「鶴頭一、茶垸染付」、1432 年 7 月 7 日条に「自分茶垸染付瓶子」という記載がある。前者は貞成親王の得度式の布施に用いられた鶴首の花瓶で、後者が七夕の花合に用いる花瓶で、いずれも元染付又は明初期の染付であると推測される7。『康富記』1442 年 8 月 1 日条には贈答品として使われたと思われる「茶碗一染付」、「染付茶垸」という記載がある。また、1437 年（永享 9 年）の『室町殿行幸御餝記』には、「御茶湯棚」、「御茶湯所之御違棚」とあり、その棚に喫茶用具が飾り付けられている。建盞、青磁、白磁の茶碗や茶入が記載された他、「水覆　染付」、「下水　染付」で、それぞれ二カ所あるが、いずれも建水を表している。また、少し時代を下がって 1523 年の『御飾記』には、「水こほし　茶碗そめつけ」が見られるが、それは上記『室町殿行幸御餝記』と同じ建水として使われたと思われる。このように、公家日記の記載によれば、当時、染付は茶道具よりも贈答品や花会で使われた飾り物で、贅沢品としての価値が高かったと言える。

将軍家の書院茶と異なる侘び茶が新しい流行として登場した天正年間に、茶会記にようやく薄茶の茶碗として染付茶碗の姿が見られる。『天王寺屋会記』（宗及他会記）1575（天正 3 年）5 月 29 日の不住庵梅雪の茶会に使用された「そめつけ茶碗」が初見とされ、天正 4、5 年頃にも染付茶碗が何回か用いられたが、あまり流行しなかったようである。安土桃山時代の武将の荒木村重は 1577（天正 5 年）4 月 13 日に染付茶

6彭丹『中国と茶碗と日本と』、小学館、2012 年、p187。
7 中路のぶ代「茶の湯における中国青花（染付）磁器の受容の様相」『日本文化史研究』2007、p48。

碗を使用し、その後の天正 6 年、11 年、13 年に染付茶碗を計 5 回ほど使用していた。その染付茶碗の様子を唯一伝世品と照合できる徳川美術館蔵の大名物「荒木高麗」と称される唐草文染付茶碗を参照して分かるように、素地が低質で発色が鈍く貫入も入っている物であり、全体からずれば侘びた風情のある茶碗である。『天王寺屋会記』の記録によると、染付の使用が 13 回で、そのうちの 12 回が茶碗で且つ天正年間に集中し、使用者はほぼ荒木村重や佐久間甚九郎であった8。『松屋会記』の場合、1583 に初めて染付が現れたが、次に出現したのは 1608 年で、鉢や小皿など会席の器として用いられたのは半分以上の 8 回であった9。このように、安土桃山時代に染付が茶会記に現れ始めたが、とても流行すると言えるほどではなかった。

江戸時代になると、茶会記に見られる染付の使用が増えてきた。その変化は徳川将軍家の茶道指南役である小堀遠州（1579 年～1647 年）と大きく関わっている。1620 年（元和 6 年）11 月 21 日～23 日に江戸城で開かれた将軍家の茶会で染付茶碗が使われたが、その茶会も遠州が関与していた。1623 年（元和 9 年）に将軍徳川秀忠が茶碗の「染付紀三井寺」を使用し、『二代将軍御会記』によると、寛永年間（1624 年～1645 年）でも上記「染付紀三井寺」が頻繁に使用され、染付香合の使用も見られる。その「紀三井寺」はいわゆる雲堂手の一つで、明代初期から中期にかけて景徳鎮民窯で香炉として焼かれたものを茶碗に転用し、雲と堂宇を有する図柄の中に人物が描かれているものである。

また、『遠州茶会記集成』に記載の染付を抜粋しみると、染付の記載は 1625 年～1647 年（寛永 2 年～正保 3 年）まで続き、使用頻度が最も高い器種は上記「雲堂手」を主体とする茶碗で合計 55 回である10。『天王寺屋会記』や『松屋会記』に比べる場合、染付の使用頻度が高く、その種類も最初の茶碗や香合の他に、後に香炉、花入、水指、建水、鎖之間の書院を飾る文法具や会席の器に幅広く及ぼしている。江戸中期に成立された『槐記』に「遠州ノ好ニテ大唐へ誂へ遣ハス」云々の記事があり、長崎貿易に多大な影響力を持つ長崎奉行や朱印船貿易商人の末次家、茶屋四郎二郎、末吉孫左衛門などが遠州の茶会記に頻繁に登場した記載は、古染付、祥瑞を当時の中国に注文したことを有力に裏付けている。

このように、中国で廃れ始めた点茶法が室町時代に日本で風靡し、新しく日本に請来された現世物の染付は、茶道具よりも贈答品や花会で使われた飾り物で、贅沢品としての価値が高かった。一方、江戸時代になると、茶会記に染付の記載が増え、特に遠州の活躍で、「染付紀三井寺」のような転用されたものが見られ、茶碗から文法具や会席の器まで幅広く使用され、日本側の注文を受けて景徳鎮や中国南部の福建で焼かれた染付も茶会で登場し始めた。ただし、江戸時代は、多様な茶の湯が併存する時代でもあり、「和漢のさかいをまぎらかす」の理念下で、和物道具の使用が唐物道具より遥かに多く、遠州が生涯約 400 以上の茶会を催した中、新唐物の染付を使用したのもわずか一部に過ぎなかった。

3　受容背景から見る茶道具に対する中日選択基準の相違

上述した染付の受容背景から、茶道具を選択する際に中日の基準が異なることが分かる。例えば、日本の茶文化では、「由来」や「由緒」を重んじ、いわゆる器の付加価値を重要視する傾向がある。

日本の喫茶史を振り返って分かるように、喫茶も茶道具も中国文化への摂取の一環として受け入れられたのである。中国の工芸品への憧れは、奈良時代までさかのぼることができる。平安時代中期から、香辛料、錦、典具帖を中心とした特定の輸入品に関する記録が史料に現れることが多くなり、鎌倉時代以降、喫茶の

---

[8] 中路のぶ代「『古染付』舶載の背景－茶会記からの考察」『帝塚山大学院人文科学研究科紀要』2005（6）、p47 表 2「『天王寺屋会記』（他会記）に記載の染付の器」。
[9] 注 8 を参照。同書 p48 表 3「『松屋会記』に記載の染付の器」。
[10]注 8 を参照。同書 p20～50。

流行に伴い、茶碗、陶器、絹、書画などが日本に輸入され、「唐物数寄」風潮を引き起こした。勘合貿易により一流の唐物が大量に日本に入り、特に『君台観左右帳記』に記録されている唐物は、美術品としての経済的価値だけでなく、文化的・美的な価値もあった。唐物は高級で貴重なものという印象があり、中国産か否かが重要な判断基準となり、次第に産地や出所を重視する伝統が生まれたのである。その後、侘び茶が発展している中でも、「唐物」の価値は変わらないと言える。『山上宗二記』（1588 年成立）の「珠光一紙目録」の「唐物ハ代物ノ高下ニ寄ヨラス、御床ニ厳ル御道具ヲ名物ト云。（中略）其外。当代千万ノ道具ハ皆紹鴎ノ目明ヲ以テ被召出ル也」という記載から分かるように、当時の多くの「唐物」は武野紹鷗の鑑賞力によって見出されたものである。

江戸初期に染付が頻繁に使われた現象の底には、根深い「唐物崇拝」の精神が働いていると言える。戦国大名が群雄割拠した時代から一転し、江戸時代は政治的・文化的に豊かな時代である。幕藩体制の政治的安定は文化ブームに貢献し、朱子学も徳川幕府の支援を受けて盛んになった。「それ茶の湯の道とて外にはなし、君父に忠孝を尽くし、家々の業を解怠なく。ことさら旧友の交をうしなうことなかれ」11と言うように、桃山時代の茶人とは異なり、この時代では儒教的な道徳や封建的な倫理観の中で茶の湯の役割を評価しようとすることがよく分かる。この時期の染付の使用は、新しい時代に現れた新しい流行であり、小堀遠州が新たな唐物として染付を位置づけ、大名茶を成立させようとする意図から発した結果だとしても理解できる。上述したように、江戸時代には様々な茶の湯が存在している。小堀遠州が活躍していた時期に、利休の侘び茶を継いだ千宗旦、公家との交友を深めながら「姫宗和」と呼ばれる独自の茶の道を開く金森宗和の活躍も見られる。備中松山藩の二代目藩主で、将軍家の茶道指南役でもある遠州は、室町足利幕府で重んじられた唐物重視の伝統を復活させ、この時代にふさわしい茶の湯を創出するために、染付という唐物で権威付ける方法を選んだわけである。遠州自身が、かつての緊張感を喪失し、武家の教養としての茶に変化を遂げようとしていた時期に、その期待を担って登場した人物であったと評される12のもその理由であると思われる。

一方、中国の茶文化では、茶器を選択する際にお茶を引き立てるか否かを重視し、実用性を一番にする傾向がある。喫茶法が変わると茶器も大きく変わる理由もそこにあると思われる。染付が登場し始めた元代に、朝廷では前代の習慣を受け継いで「団茶」や「餅茶」を飲む一方、民間では「散茶」や「抹茶」を飲むほうが圧倒的に多かった。それ以降、宋代から始まる点茶法が衰退し、急須で葉茶を浸す淹茶法が主流となり、現代まで続いている。器による映えの重要性は茶書に記録された茶器に対する評価からよく分かる。

特に茶碗について、上述した『茶疏』に「茶碗は、古くは建窯の兎毛釉天目が好まれたが、これも碾茶を闘わすのによいというだけのことで、今日では純白のものを佳とする。同時に、小さいのを貴ぶ。（略）次は真物の回青がよい。」13という記載がある。すなわち、宋代の茶は、点てた時の色が白いものほど重宝されたため、建窯の兎毛釉天目のような黒い茶碗のほうが良いとされるが、明代では蒸したり炒めたりした緑茶を飲むため、白い茶碗のほうがお茶を一層引き立てるのである。白磁をベースとした染付は、外側に模様があるものの内側が純白のままなので良いとされ、しかも香りが集中できる理由で小ぶりな物が好ましいという。明代最初の茶書『茶譜』にも、お茶を入れて湯が澄んで美しいという理由で、白磁を推奨した14。このように、お茶の色を損なわないという機能性から茶碗を選んでいる。また、「湯瓶」（湯沸かし）を選択

---

11 千宗室主編「小堀遠州書捨文」『茶道古典全集』第 11 巻、淡交社、1977 年、p137。
12 谷端昭夫『近世茶道史』、淡交社、1988、p46。
13 注 5 を参照。
14 朱自振、鄭培凱編集『中国歴代茶書編集』、商務印刷館、2014 年、p176。

する時にも、「瓶は小さくなければならない。湯の加減がみやすいし、またお茶を点てるとき注ぐ湯の量が的確に出せるからである。」15というように、同じ機能性に基づいて物を選んでいる。

映え重視という特徴は一貫して歴代の茶書にも見られる。『茶経』の「五之煮」には、茶の色が緗（淡い黄色）であると指摘し、「碗は越州が上品。(略) 口が反らず、底が反っていて浅く、半升以下しか入らない。越州の磁器、岳州の磁器はみな青い。青いと茶がよく見え、茶は白紅の色になる。邢州の磁器は白いから、茶の色は赤くなる。寿州の磁器は黄色なので、紫になる。洪州の磁器は褐色なので、茶の色は黒くなる。すべて茶に宜しくない。」16という記載がある。つまり、越州で造られた茶碗を一番とした理由は、その磁器は青くて茶がよく見えるからである。

このように、中国の茶文化では、茶器を選択する際に、常に「お茶に適するか」を考え、機能性を優先するため、素材の良さや職人の技による実用効果の発揮が最も重要な評価基準となる。一方、日本の場合、茶道具は鑑賞対象でもあり、江戸初期に新唐物として茶の湯に染付を積極的に取り入れた背景から分かるように、実用性よりも物語性や由緒など道具の付加的価値を重視する傾向がある。

4　受容状況から見る美意識の相違

日本に輸入した染付は、基本的に中国南部の民窯に注文したもので、題材の選択、造形の画一性などにおいて官窯の堅苦しい制約を受けなくても済む。中日茶人たちがそれぞれ好んだ染付から、両側の美意識の相違も見える。

日本の場合、上品で簡素な古びた趣のあるものが好まれる。例えば、日本で「古染付」と呼ばれる青花磁器は、色が薄くやや沈んだ青色が多く、様式的には次ような特徴を持っている。すなわち、第一、絵柄が一般的に「野放図」、「自由奔放」、などと評されるものであること、第二、絵柄とともに詩賛が多いこと、第三、器の口縁部や角、稜線部などに釉薬が剝げ落ちた「虫喰い」があることである17。特に「虫喰い」はやや粗悪な土を用いたときに生じる欠陥の一種であるが、その表面に点々と存在する小さな粒状のくぼみや欠けを侘びの景色として広く受け入れられている。また、染付の裏面にある「砂付き」を染付の魅力とする人もいる。器形からすれば、志野・織部や唐津など桃山時代の器形に倣ったものが多く、粗悪で逆に雅味があることで茶人たちに賞翫されていた。香炉から茶碗を転用した「紀三井寺」と呼ばれる染付は、口縁がわずかに開いたり鉄釉を施したりしたもの、胴や腰に鉄釉の凸帯をまわした胴紐の手など、いくつか変化を見せつつ全体的に半筒形と言われる形を呈している。あえて「不具合」を美として注目することが日本側の特徴であると言える。

また、中国の明末の崇禎年間(1628 年～1644 年)を中心に景徳鎮で焼かれた祥瑞は、緻密な白磁胎に鮮やかな青藍色で文様を表し、上質のコバルトや素地を用いた染付で、水指、香合、瓢形瓶など独特の器形のものが多い。模様と言えば、山水、人物、花鳥のほか、幾何学模様がそれも緻密に描かれ、器の表面を埋め尽くしている。「古染付」よりも白く上質な磁胎が使われ、釉薬の透明感が強く、輝きが強い傾向が見られる一方、虫喰いがあったり、高台の部分に砂粒の痕が残っていたり、高台の内側に高台を削り出したカンナ跡が多いなど共通する部分がある。完璧さを追求するよりも土の香りを感じさせる自然な趣を求める。そのような美意識は、染付を茶の湯に積極的に取り入れた小堀遠州の「遠州七窯」と言われる茶陶にも見える。赤みがかった器に黄色釉薬や黒釉をかける志戸呂焼など、色が鮮やかである一方、素朴で枯淡な味わいが溢れ

---

15 注 5 を参照。同書 p189。
16 注 5 を参照。同書 p73。
17 河原正彦『古染付　資料編』、京都書院、1977 年。

ているものが多い。

桃山時代末頃から江戸初期にかけて、積極的に海外へ注文された染付がさまざまに用いられているのは遠州の茶会のみと言ってよいほどと言われている18。白い磁器をベースとした染付は大名茶人の小堀遠州の好んだ「白」のイメージに共通する部分があり、彼自身の美意識を反映したものとも言える。利休時代は侘びを徹底した渋い趣を高く評価し、特に手捏ねによるわずかな歪みと厚みのある形状を特徴とする黒楽茶碗が好まれ、利休の後の茶の湯を牽引した古田織部は、緑や赤など大胆な色を使い、「ひずみ」より一歩進んで丸い茶碗をわざわざ歪ませる「崩す」という道を走り、不均衡さに美を見出そうとしている。侘び茶が新しい流行となった天正年間に、染付があまり広く使われていなかったのも利休が追究した究極な侘びにふさわしくないと判断したからと言えよう。一方、平和建設の精神を以て茶の湯を追求した遠州は、江戸寛永文化の中心人物で、「洗練」、「気品」、「清潔」を染付に求めていた。遠州好みの茶碗は素朴な渋い地に明るめの釉をかけた整然としたものが多く、釉薬の変化だけで飽き足らずに、積極的に器に独特の絵模様を添える傾向がある。彼の「綺麗さび」という美意識は、公家文化の有職故実に精通し、室町以降の武家精神を踏襲しつつも、古き利休の侘びの精神を巧みに融合させることから来たものであると思われる。豊臣から徳川へという激動の時代を生き抜き、日本の美の系譜を再構築したことから、寂びの色合いが添ったおおらかな風趣を持つ染付を選んだのである。

一方、中国の場合、各時代に応じて器形や様式に違いがあるものの、主に形状が整っており、コバルトの発色が濃く鮮やかで、絵付けの筆線が力強く伸びやかな上質な染付が好まれる。特に黄金期とも言われる宣德時代の官窯に生産された染付は、いずれも形状が整然とし、釉色が純正で艶があり、色を施す際に濃淡が強く出され、文様に強いコントラストが付けられる特徴がある。上述した『茶疏』の「茶碗がかならず円く整ったものを選ぶこと、しまりがなく歪んだのを用いてはならない」19というように、日本の茶の湯で鑑賞ポイントと見なされる「歪み」や「虫喰い」を有するものは、出来栄えが悪く不完全なものとして捨てられてしまうのが一般的である。また、人気な画題は龍文・鳳凰文・動物文様・植物文様・人物文様・吉祥文様などの縁起物である。動物文様の中で多いのは麒麟・孔雀・獅子・鴛鴦・魚・虫など、植物文様として唐草文・松竹梅文・芭蕉文・葡萄文・瓜文などがある。茶器の他に、食器、日常生活用品や祭器としても幅広く使われる。

ただし、茶器として広く使われる染付が純色の白磁に叶わないという記載がしばしば見られる。特に茶書には上質な茶器を「玉」と喩えたことが多い。このように、茶人たちは温潤かつ繊細で玉のような美しい光沢感を持つものを好んで求める傾向がある。明・屠隆『茶箋』には、「宣德期に尖足型の茶碗があり、材料が上質で様式も優雅で、厚くて冷めにくく、玉のように白く、最も茶の色にふさわしいため茶碗の中の一番とされる。」20という記載がある。宣德期の尖足型の茶碗、いわゆる鶏心碗が玉のように白いと絶賛している。明・高廉『茶箋』には、「印花を加えた宣德窯の白い茶碗は、質の厚い白く、様式が古雅で、様式が適切で、玉のように透明感のあるものである」という記載があり、明・高元濬『茶乗』には、「茶碗には、また上質で優雅な様式で厚くて冷めにくく、玉のように白いものが、茶の色にふさわしい。」21という記載がある。そこには古来の玉に対する崇拝思想が見られる。現存最古の字書である「説文解字」には、玉は「石の美にして五德あるもの」とされ、いわゆる「仁、義、智、勇、潔」を持つものと解釈され、単なる鉱物と

---

18 根津美術館『小堀遠州の茶会』、根津美術館、1996 年、p144。
19 注 5 を参照。
20 注 14 を参照。同書 p240。
21 注 14 を参照。同書 P287。

しての魅力ではなく、敬意が込められた特別な存在として扱われてきた。茶詩にも、急須を玉壺と呼ぶことが多くある。明の永楽帝の頃に至って、景徳鎮窯では玉にも優る究極の美しさを持つ白磁を手に入れた。「甜白」と呼ばれる白い釉を掛けて焼き上げた白磁は落ち着きと静けさを漂わせ、白磁の新たな一面を見せた。純度の高い釉で均一に塗布され、表面に凝集した釉や垂れた釉もなく、非常に完成度の高いものを作り出した。

これらの事情に基づき、白磁に青い模様を付け加える染付が元代に登場した当初、「俗」と評価され、文人層で高い評価を得られなかったのが、このような美意識との食い違いがあったと言える。また、その原因として青と白の配色が従来の漢民族の文化で重んじられる陰陽五行説に反することも考えられる22。陰陽五行説とは、万物が「陰・陽」の二気、「木・火・土・金・水」の五行で成り立ち、これら陰陽五行の要素で世の中は回っているという思想である。五行説に配色されているのは、「正色」と呼ばれる青・赤・黄・白・黒で、「木＝青、火＝赤、土＝黄、金＝白、水＝黒」となる。互いに制約し合う関係性を「相生・相克」で表し、金が剋するものは木で、色彩に置き換えると、白と青の組み合わせはタブーだと考えられていた。一方、ペルシャ文化では、白と青の組み合わせは崇拝すべき神聖で純粋な意味を持ち、漢民族文化での禁忌な意味を一切有しないものである。その原因もあり、元青花は当時国内で使用されたものよりも、海外輸出されたほうが遥かに多かった。ただし、染付は焼成工程が比較的簡単で、青色の文様が長期間使用しても退色・剥落しにくいなどの実用性を持っているため、大衆の生活用品としては多く用いられていた。明以降、文化が融合して青と白の配色がタブーである説が徐々に薄れ、官職に就かず、詩文・茶・書画など風雅の道に心を寄せる「文人層」が拡大していく中、卓越した技術と目を見張るような絵付けで茶器の外観の可能性を広げてくれる染付が、創作意欲を大いにそそるものとして好まれるようになった。

このように、美意識の根底には中日が長年に培ってきた独特な文化や思想があり、時代によって変化する部分もあるため、一概に判断し難いが、染付に対する評価や好みから中日美意識の相違の一端を垣間見る。日本の茶人たちが好んだ染付は、漠然とした中間色を持つ寂びの色合いが添ったおおらかな風趣を持つものが多く、「虫喰い」や疵などの「不具合」を美として認めるのに対し、中国の茶人たちは常に完全な美を追求し、整然とした形状に光沢感があり濃淡が強く出された完成度の高い上質なものほど好む傾向がある。

おわりに

以上、染付の受容状況を分析したうえ、中日茶文化の相違点について考察してみた。染付は中国で点茶法から淹茶法へと移り変わっていく時期に、中近東の異文化との交流によって元代前後に完成された磁器である。従来の漢民族の文化からして違和感を感じたことが多く初期に文人層から高い評価を得られなかったが、貿易磁器の性格が強く実用性が高いため好評に変わり、茶器の他に生活用品具としても幅広く使われる。そのような染付が 14 世紀半ば頃に日本に請来された当初は、茶道具よりも贅沢品としての価値が高く、侘び茶が新しい流行となった安土桃山時代に、薄茶の茶碗として登場したものの、あまり普及しなかった。江戸時代になると、小堀遠州が時代にふさわしい茶の湯を創出するために、染付という新唐物の権威性を利用することにより、頻繁に使われるようになった。上述の受容状況に基づき、茶道具に関する中日両側の選択基準や美意識の相違が見える。日本の茶文化の歴史を考えると、貴族から商人・町人へとトップダウンの流れがある。茶道具は鑑賞対象としての性格が強く、その根深い「唐物崇拝」により、「由来」や「由緒」を重んじる選択基準を形成した。一方、中国の茶文化では、茶器は賞翫品というよりも実用品であるため、

[22] 肖世孟「『白地青花』配色に関する論考」『美術研究』2021,(06)、p133～136。

お茶との相性をはじめとする機能性を優先する傾向がある。また、日本では、上品で古びた趣のある簡素な染付が好まれ、完璧さよりも土の香りを感じさせる自然な趣を求め、「虫喰い」や垂れた釉などの「不具合」に美を感じる。これに対して、中国では、整然とした完成度の高い上質な染付ほど好まれ、特に玉に対する崇拝思想から玉のような美しい光沢感を持つ白磁のほうが染付にも勝る最上級な茶器として推奨する。このように、不完全なものに美しさを見出す日本側と完全さの美を追求する中国側の美意識の特徴を明らかに示している。ただし、茶文化は非常に奥深いもので、しかも中日茶文化の発展に時間差があり、染付だけで比較し難い部分もあるので、今後考察を深めていきたいと思う。

上海第二工業大学　外国語と文化伝播学部

参考文献

森蘊、恒成一訓『小堀遠州』創元社 1967
千宗室主編『茶道古典全集第 11 巻』、淡交社、1977
布目潮渢、中村喬『中国の茶書』、東洋文庫、1983
谷端昭夫『近世茶道史』、淡交社、1988
長谷部楽爾監修『中国の陶磁 8 元・明の青花』、平凡社、1995
長谷部楽爾監修『日本出土の中国陶磁』、平凡社、1995
根津美術館『小堀遠州の茶会』、根津美術館、1996
谷晃『茶会記の研究』、淡交社、2001
李知宴「明代磁器研究(三)」『中国歴史文物』2003（02）
中路のぶ代「『古染付』舶載の背景－茶会記からの考察」『帝塚山大学院人文科学研究科紀要』、2005（06）
陳雨前、朱浙安「宋代景徳鎮の青白磁器に係る『玉崇拝』の美的意義に関する研究」『中国陶磁』、2006（12）
中路のぶ代「茶の湯における中国青花（染付）磁器受容の様相」『日本文化史研究 / 帝塚山大学奈良学総合文化研究所編 38』、2007（03）
弓場紀知『青花の道：中国陶磁器が語る東西交流』、日本放送出版協会、2008
彭丹『中国と茶碗と日本と』、小学館、2012
朱自振、鄭培凱編集『中国歴代茶書編集』、商務印刷館、2014
蔡定益「明代の御窯と茶文化」『中国美術研究』、2019（04）
善田のぶ代『古染付と祥瑞 その受容の様相』、淡交社、2020
李瓊璟、何建斌「明代青花磁器及び対外交流について」『遼寧省博物館紀要』、2020
矢部良明『宗旦 vs.遠州：茶道に二大流派を築いた先導者』宮帯出版社、2021
肖世孟「『白地青花』配色に関する論考」『美術研究』、2021(06)
夏孝言、李其江、陳天民、「過去 10 年間の元青花の考古学的発見と研究成果の概観」『中国陶磁器工業』、29(03) 2022